

メキシコ／メキシコ市

ハイヒールからペタンコ靴に 安全な街を 女たちが闊歩^{かつぽ}

ジェットロ メキシコ事務所 西尾 瑛里子



これまでは治安の問題から女性駐在員は皆無に等しかった。だが、ここ数年で女性駐在員の数は急増。筆者もその一人であり、ついに女子会を開催するまでに…。治安の改善は街に活気をももたらしている。メキシコ市に駐在してみても目にしたものを挙げれば……

古い街並みの中で人々は…

市内の高級住宅街であるボランコ地区に、通称「ボランキート」と呼ばれるエリアがある。このエリアには高級レストランが集中しており、週末の昼下がりには食事を楽しむ人々であふれる。皆のお気に入り、日光がたっぷり降り注ぐテラス席。エアコンの効いた室内席ではない。

標高約 2,200 メートルに位置するメキシコ市。湿度は低く、日中の気温も年間を通して 20～30 度と爽やかで過ごしやすい。雨期でも、夕方にスコールのような雨がざっと降る以外は晴れていることが多い。この過ごしやすい気候のせいで、人々はとにかく屋外で過ごすことを好む。たとえ雨が強く降っていたとしても、雨よけシェードなどを駆使して、何としてもテラス席に居座ろうとする人さえいる。人々がくつろぐレスト

ランやカフェは、古い邸宅や建物を改装したものが多い。高い天井、石造りの階段、凝った装飾を施した門構え……いずれも重厚で趣のある雰囲気を醸し出している。街の至る所で見かける石畳の小道、古い修道院や劇場などもまた、歴史を感じさせるアイテムだ。それもそのはず、メキシコ市の歴史をひもとけば、15 世紀中ごろから栄えたアステカ文明期にまでさかのぼる。

現在のメキシコ市がある場所は、アステカ王国のかつての首都テノチティラン（石のように堅いサボテンの意）だった。「蛇をくわえてサボテンに止まっている鷺^{ワシ}のいる場所に街を造れ」という神のお告げに従いアステカ人はここに街を創設。もともとここはテスココ湖という湖で、その中央部を埋め立ててできた土地だ。メキシコ国旗の図柄もこの神話に由来しており、旗の中央には、蛇をくわえた鷺がサボテンに止まっている姿が描かれている。



ボランキートのイタリアンレストラン「NONNA」



旧市街地 オペラハウス（ベジャス・アルテス宮殿）



映画「007 スペクター」の舞台に



ニューボランコ地区

1521年にスペイン人のエルナン・コルテスがアステカ王国を征服すると、テノチティトランは破壊され、その上にスペイン・コロニアル調の都市が築かれた。1821年に独立を果たして以降、度重なる占領や内戦の歴史を経て、1900年前後には近代化が進み、ヨーロッパ様式の邸宅や劇場などが多く造られるようになった。1920年代に入り、政情の安定化に伴い経済成長が続き、瞬く間に大都市に成長した。

80年代には1人当たりGDPが既に1万ドルを超え、中進国の仲間入りを果たす。それ以降、メキシコ市では長きにわたって人口集中や大気汚染、交通渋滞など、いわゆる都市問題に悩まされることになる。現在でも道路や上下水道などの都市インフラの老朽化や、拡大し続けるモータリゼーションによる慢性的な渋滞、治安問題など課題は山積みしている。近年急速な発展を遂げる他の途上国を見ると、大規模な都市開発で広く整備された道路や、巨大なオフィスビルや住居が立ち並ぶ近代的な街づくりがなされている。だが、メキシコ市の場合は事情が異なる。すでに都市としての歴史が長いから、抜本的な都市整備に着手できず、問題が起こるとその都度、パッチワークのように対処療法を施すことしかできないからだ。

だがそのことは悪い面ばかりではない。街に多く残る古い建物は景観に深みを与えている。近年メキシコ市では、これらの古い街並みを保全しながら再開発する取り組みが進んでいる。例えば、ある特定の地区は「建物の高さを8階までに制限し、正面を残す形で建て替えなければならない」などと条例で定めている。また財政難などの理由によりインフラ整備は遅れがちだが、少しずつではあっても道路整備や歩道拡張とい

った工事は行われており、ここ数年で歩きやすくなったエリアが増えたように感じる。

前出のボランコ地区のようなおしゃれなエリアでは、積極的に古い建物部分を生かしつつ、内部はモダンで機能的なデザインにリフォームすることがトレンドとなっている。古い街並みに溶け込んだ趣のあるカフェやレストラン、雑貨店は人々が余暇を楽しむ場を提供してくれている。

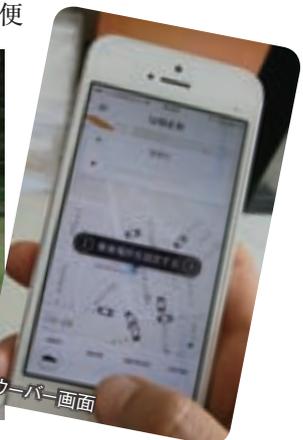
配車サービスで気軽に街中へ

メキシコ市はもともと自動車の数が多く、慢性的な渋滞と排ガスによる大気汚染に悩まされてきた。また、当地には特殊な交通事情もあった。

メキシコのタクシーは2種類ある。流しの「リブレ」と、登録制で無線呼び出しの「シティオ」だ。リブレは無認可のドライバーが多いため、犯罪に巻き込まれやすいといわれており、メキシコ人でも敬遠する人が多い。シティオは無線タクシーだが、決まった乗り場でしか乗ることができない。それゆえ、乗り場を把握しておかなければならず、乗り場がないエリアでは利用することができず不便



エコピシスタンド



ウーバー画面



地元でパチリ (左から4番目が筆者)



サッカー人気は不動

を感じていた。よって、ある程度の所得がある人たちは自家用車を所有し、どんなに近い距離でも自分の車で移動することを余儀なくされ、これが大気汚染を加速していたのだ。

そんな状況下に登場したのが「ウーバー (Uber)」と「エコビシ (ECOBICI)」だ。まずウーバーとは、スマートフォンさえあれば、どこにいても手軽にタクシーを呼べる配車サービスだ。料金はシティオよりも格安で、アプリ上で自動的に決済される。車両は新しく運転手も礼儀正しい。当然、瞬く間に需要は増え、人々の重要な足を担うようになった。自家用車で出掛けて渋滞や駐車場の確保に悩んでいた人々も、ウーバーを利用することで余計なストレスをためずに移動を気軽に楽しめるようになった。運転が苦手な筆者も、ウーバーのおかげで行動範囲が格段に広がり、週末に気軽に街に出掛けられるようになった。生活には欠かせない、日本食材店への買い出しも、以前は知り合いの駐在員に頼んで乗せてもらうなど、気軽に行けなかったが、今ではウーバーで15分足らず。自炊にも熱が入るようになった。

エコビシはレンタサイクルシステムだ。昨今、世界中の都市部で導入されている。メキシコ市政府観光局は10年に導入、今では街中の至る所にエコビシスタンドが設置されている。年間登録料は400ペソ (約3,200円)。1回のレンタルにつき45分間までは無料で利用できる。返却時は借りた場所とは別のスタンドに返却してもよい。スマートフォンでアプリをダウンロードしておけば、地図上でエコビシのスタンドの位置や、自転車の空き状況を確認することができる。スーツ姿のビジネスパーソンが通勤に、主婦がスーパーまで買い物に、若者が公園でサイクリングを楽しむ一など、エコビシはさまざまな人にさまざまな用途で

使われている。道路は老朽化が激しく、至る所に割れや陥没があり歩くのも大変だった。それが最近では、自転車専用道の設置が進み、自転車での移動も格段にやすくなった。肥満大国と呼ばれ、健康に対する人々の関心は高まっており、エコビシはこれからも多くの人に利用されるだろう。

ウーバーやエコビシの登場は、人々の移動手段の選択肢を広げた。これまでは車による点の移動でしかなかったものが、面の移動へと広がりを見せている。

街を歩けるようになった

治安問題はメキシコにとって、いまだに解決されない深刻な問題の一つだ。だが街が再開発され移動手段が変わったことで人々の生活も変化し、メキシコ市では治安改善の兆しが見られる。発砲事件やすり・ひったくりの被害のニュースは耳にするものの、普通に生活している分には、脅威はさほど感じない。長年メキシコ市で暮らす駐在員に聞くと、以前は衰退したエリアが多く、また移動も車がメインとなっていたため、人が道を歩く姿は見られず、どことなく暗たんとした雰囲気か漂っていた。それがここ最近では、ジョギングや犬の散歩をする人々など、道を歩く人の姿が目につくようになった。その影響からか街の雰囲気が明るく感じられるというのだ。

筆者も一つ感じている変化がある。それは女性の靴だ。中間層以上のメキシコ人女性は目を疑うほど高いヒールの靴を履いている。それは裏を返せば、靴を履いて歩く範囲が非常に狭いことを意味する。しかしここ最近、フラットシューズを履いている姿をよく目にするようになった。デパートの靴売り場でも3割程度はフラットシューズが占めている。彼女たちも堂々と道を歩くようになったのだ。

治安の改善は街に活気を呼び戻した。筆者も自由にウインドーショッピングを楽しんでいる。安心・安全な街で暮らす幸せをあらためてかみしめている。 **JA**